

著：大原 國章

皮膚疾患のクロノロジー

—長期観察で把握する母斑・腫瘍の全体像

書評者：飯塚

—(旭川医科大学皮膚科学講座)

これは驚くべき本である。少なくとも筆者が知る限り、皮膚科関係では類書を見ない。このようなクロノロジーのアプローチが可能になるためには、膨大な症例の蓄積を要するが、著者の大原國章先生は、鮮明な臨床写真を、経時的に揃え、かつ強い説得力を持った提示を行っている。

周知のように、大原先生は、皮膚科における手術のエキスパートとして、虎の門病院で全国の若手皮膚科医の手術トレーニングにあたった方である。技術のみならず手術そのものの考え方も教え込んだ。全国各地に散らばっている弟子は筆者の教室にも存在するが、彼らが一樣にいうことは、皮膚科医としての大原先生の恐るべき眼であり、そもそも手術適応についての厳しい評価である。

優れた術者として大原先生の扱った症例数は、腫瘍、母斑を含め膨大な数にのぼる。その中で、長期にわたる経時的な記録・観察、すなわちクロノロジーの発想が生まれたと思われる。いつでも、そ

して誰よりも、上手に切れる大原先生であるがゆえに可能であったアプローチであろう。当然、微細な変動を認識するための持続的な経過観察はきわめて重要で、細心の注意を払って行われている。ここには患者・医師の強い信頼関係があり、こうして見えてきたものを提示するのであるから、これは強い。

ある特定の疾患についてクロノロジーを語る皮膚科医はいるし、彼らは、その疾患の専門家と称される。しかし、これだけの数の疾患、病態について、特に腫瘍系で、本書に匹敵する記載、例示のできる皮膚科医は、空前絶後であろう。さらに驚いたことに、クロノロジーの記載は、いくつかの炎症性疾患にまで及んでおり、そこには一流の皮膚科医としての、病態にまで踏み込んだ冷徹な眼が光っているのである。

疾患は、良性、悪性を含め多岐にわたる。そして、これらの具体的事例が、われわれにとって、切るべきか、切らざるべきか、対応

に迷うものがきわめて多いということが、本書の最大の眼目である。さらに個々の疾患では、随所に、臨床像から見た診断の根拠が示され、手術を含めた治療ないし経過観察により、どの程度の改善が期待、予測できるかなど、著者の経験に基づいた考え方が、明示されている。

書評というものは、ある意味で大変に難しい。真に優れた本は、評者自身が試される要素がある。長く大学の教官を勤めている筆者にとって、著者から鋭いメスを突きつけられている感じを持った。本書は、通常の教本とは全く異なる「新しい古典」であり、非常に考えさせられる真の意味の「教科書」である。

● AB判 頁336 2012年
定価9,450円
(本体9,000円+税5%)
[ISBN978-4-7809-0827-5]
学研メディカル秀潤社刊